

「多文化交流プラザ」から

岐阜市の「国際交流月間」をご存じですか？岐阜市の友好姉妹都市は、世界に6都市あるんです。その提携月が「2月」であることが多いため、岐阜市では2月を「国際交流月間」と定めています。それに合わせて、2023年2月には「国際交流イベント」として、友好姉妹都市の紹介や映画上映等を開催する予定ですので、楽しみに！



「岐阜市立中央図書館」から

10月22日(土)～23日(日)に開催された、公共交通フェスタ。岐阜市立中央図書館も参加して、司書がコミュニティバス車内で絵本の読み聞かせを行いました！バスの中での読み聞かせは特別な雰囲気。バスや乗り物が出てくる絵本に、参加してくれた子どもたちは、楽しそうに声をあげていました。



小さい頃から通っている
のでメディコスには馴染み
深い場所です。勉強に
疲れたら、本を読んだり
してリフレッシュできるの
が良いです！

VOICE
03

高田珠里さん
山田真子さん



VOICE
04
西田佳正さん
梨奈さん
有佑くん

子どもがよく「メディコス
行こう！」と言うほど気に入
っています。週に1回は
来れています。開催されて
いるイベントに参加する
こともあります。



MEDICOS NEWS

VOL.07

① ぎふ古今の本棚からおすすめの一冊

観光旅行ブームに沸いた昭和初期の観光パンフレットから、全国各地の観光を読み解く「日本の観光―昭和初期観光パンフレットに見る」。交通網が全国に張り巡らされ、庶民が手軽に旅行できるようになった近代以降、多くの観光パンフレットが発行されました。中でも魅力的な観光名所が詰まっている吉田初三郎氏の「鳥瞰図」は、「ぎふ古今」の「歴史ギャラリー」でも使用。戦争までの東の間のブームですが、当時の日本人のエネルギーを感じます。

※岐阜は続編にあたる「日本の観光2」(谷沢明氏：著 / 八坂書房)に掲載



② あなうつくしや。闇夜に光るメディコス

普段メディコスを昼間に訪れるという方にぜひ見てほしいのが夜の姿。特に外観は必見です。日が沈むと図書館は一斉にカーテンが開きます。すると浮かび上がるのは、火を灯した提灯のようなグローブと、それに照らされる天井の木格子。あなうつくしや。「メディコス八景」登録間違いない。全てが異なるグローブの柄は、多様性の象徴です。人々が集まる大きな家(メディコス)の中の小さな家(グローブ)。そんなことを意識して見ると面白いですね。



【みんなの森 ぎふメディアコスモス】
〒500-8076 岐阜市町町40-5
TEL.058-265-4101 <https://g-mediacosmos.jp/>

季刊 メディコス文化道 VOL.07 (2022年12月発行)
発行 / みんなの森 ぎふメディアコスモス
編集・デザイン / さかだちブックス(株式会社リトルクリエイティブセンター)



MEDICOS
BUNKA
MICHİ

季刊

文化
道
メディコス

VOL.07

【特集】

祝！「Library of the Year 2022 大賞」受賞！

【岐阜の文化地図】

司町・伊奈波エリア



メディコス掲示板「winter」

総合プロデューサー
吉成信夫からの
ひとこと。



「Library of the Year 2022大賞」に選ばれたことで私がかつとも嬉しかったのは、図書館だけでなくメディコス全体に及ぶ融合的な活動を評価していただいたことです。それぞれに積み重ねてきたことが、喜怒哀楽の記憶とともに、パッチワークのようにつながり、1枚の布に織り込まれてきたのだと思うからです。これからも「みんなのコモンズ」をさらに広げていきましょう。

「市民活動交流センター」から

10月に3年ぶりの「フム・ドキ・ワイワイ」を開催しました。過去最多の43の団体が参加。フムフム考え、ドキドキ体験し、ワイワイ楽しむ、多様な活動が繰り広げられました。ステージ発表には盛大な拍手が送られ、体験・参加型プログラムは予連れ家族に好評。“久々に夢中になった”といった感想をいただきました。



“まちの人”の声

メディコス2階にある岐阜市立中央図書館の利用者の声をお届けします！

孫が本が好きなので、これまでに2～3回来ています。蔵書が充実していて、開放的で子どもがいても気楽に来れるのありがたいです。

VOICE
01
尾関友子さん
恵礼奈ちゃん



VOICE
02
信田正志さん
祥汰くん

建築のデザインがおしゃれで、開放的な空間が心地よく、図書館を中心によく来ています。1人でも親子でも楽しめますね。



【特集】FEATURE 祝！「Library of the Year 2022 大賞」受賞！



図書館と市民活動を軸に、 地域の可能性を追求する複合文化施設

これからの図書館のあり方を示唆するような先進的な活動を行っている機関を評価して、NPO法人 知的資源イニシアティブが2006年から毎年授与している「Library of the Year」。今年、みんなの森 ぎふメディアコスモスは、従来の図書館イメージを覆す図書館サービスを提供し、他の図書館等の参考となる先進的な活動を評価する「優秀賞」を受賞。さらに、その中から「大賞」に選ばれました！

評価ポイント

- 「知・文化・絆の拠点」の建物と機能が見事に融合
- 「子ども司書養成講座」「おとなの夜学」等を通して地域の魅力と可能性を掘り起している
- 市民と共に成長する複合文化施設のモデル

子どもの声は未来の声

子ども司書養成講座



「本と人をつなぐリーダー」を育む人気企画。子どもたちが司書の仕事を学び、おすすめ本の紹介やPOP作りを通して、思いを自分の言葉で表現します。

おとなの夜学



「岐阜にしながら知らなかった岐阜を知る」がコンセプト。岐阜の地域文化に精通した“その道の第一人者”の講座を開催しています。

新たなシンボル シビックプライドプレイス “ぎふ古今”

2022年にメディコス1階にオープンした岐阜の歴史・ひと・文化の魅力を集めた情報発信拠点。iPad端末とタッチパネルモニターが設置され、岐阜のまちの歴史や文化の断片にゲーム感覚で触れたり、オリジナルのまち歩きマップを作ることができます。



メディコスの設計者である伊東豊雄さんにコメントをいただきました！

東日本大震災後、建築家の仲間と作ってきた集会所「みんなの家」は、被災地で家や仕事を失った人たちが新しい生活を始めるためのささやかな憩いの場です。東北や熊本では今は公民館のように住民に親しまれています。私はこれまでみんなの家のような建築と、自分が設計している公共施設との間にギャップを感じてきました。つまり、みんなの家に近づけばデザイン性が損なわれ、デザイン性を追求するとみんなの家から離れていく。建築家としてはそれがジレンマでした。そんななか、それらの両立に最も近づいた公共施設がメディアコスモスだと思います。



From
Toyo Ito
建築家
伊東豊雄

メディコスは公共施設でありながら、みんなの家の役割を果たしています。メディコスに子どもを連れてくるお父さんは、子どもを銭湯に連れていく感覚でしょう。図書館でもありながら、まちなかを歩いているような、公園に来ているような感覚がありますよね。理想的な公共空間だと思います。

- メディコスクロニクル - 開館から7年をふりかえろう

開館
2015



朝井リョウ氏を招いた、将来作家を目指す子どもの自作短編作品の発表会。



ぎふライブラリークラブ



シビックプライドライブラリー

岐阜で楽しく豊かに生きていくための暮らし方の提案やまちの情報を発信。



メディコス文化道



メディコス編集講座

コピーライトやデザインなど、地域で活躍する編集者を育てる通年の講座。

シビックプライド コラム

from
メディコス編集講座

岐阜のまちを編集するエディター(編集者)を育成する「メディコス編集講座」の1期生による、個性あふれるコラムをご紹介！コラムの全文はシビックプライドプレス公式サイトからご覧いただけます。

1 五感解放～金華山の麓で喉をうるおす

梅雨が明け、晴れた日曜日の空を見上げて「今日行こう!」と思い立った。荷物をバッグに詰め、胸の高鳴りを抑えながら、未知の世界に飛び込む少年のように家を出た。JR岐阜駅から長良橋通りをバスに揺られ、約15分。そして、昼過ぎに金華山最寄りの「岐阜公園歴史博物館前」に降り立った。岐阜公園を通り抜けて「禅林寺」付近の「百曲り登山道」から登り始める。五感を研ぎ澄ませ、やっとの思いで山頂部にある岐阜城に到達。そして、いつもの呼吸を取り戻したところで「七曲り登山道」で下山。登山道出口から約5分の「公園の湯」で一番風呂を堪能後、失われた体力の回復を待ちながら、最後の目的地「Tap Room YOROCA」での至高の一杯に向けて身も心も清めていく…。



メディコス編集講座第1期生

石田 モトキ

最近、岐阜に住み着いたさすらいの旧転勤族。岐阜のコト、いろいろ勉強中です。

全文は
こちらから/
QRコード

2 「巨匠」を感じる散歩道 ～長良橋から柳ヶ瀬へ～

「巨匠」。ある方面で際立ってすぐれた人を指す言葉だ。彼らに想いを馳せて、岐阜の街をそぞろ歩くのも悪くない。岐阜ゆかりの巨匠といえば、川端康成だろうか。短編「篝火」に登場する宿は、今も鶴岡見物にもってこいだ。続いて「花子の墓」を目指し浄土寺へ。花子は明治から大正にかけて欧米で活躍した女優。「花子 永眠の地」の石碑の先にあるごく普通の墓石は、激動の生涯を送りつつ、「知る人ぞ知る」存在となった花子に似つかわしい。柳ヶ瀬にも、ゆかりの映画監督がいる。『ドライブ・マイ・カー』でアカデミー賞を受賞した濱口竜介監督だ。監督は自らの映画の原点を、柳ヶ瀬の映画館に通った小中学校時代だと語っている。柳ヶ瀬には巨匠ゆかりの映画街として、これからも歴史を刻んでほしい。



メディコス編集講座第1期生

山下 雅弘

お隣の三重に生まれ育ち、社会人になって岐阜へ。平日は名古屋に通いつつ岐阜を想う。

全文は
こちらから/
QRコード

